



NPO 法人 天使のほほえみ 会 報

発行所 NPO法人 天使のほほえみ
理事長 鎌田久子
会議室 東京都中央区銀座 8-12-5
〒104-0061 全国燃料会館 9階
年会費 個人 一口 千円以上
法人 一口五千円以上
郵便振替口座 00100-6-316987
特定非営利活動法人 天使のほほえみ

新春号 No.3
発行日 平成19年1月25日

ホームページ: <http://angelsmile.yu-yake.com/> ブログ: <http://angelsmile06.blog.shinobi.jp/>

◎胎児と子供は国の宝です！

華やかに咲く赤やピンクのシクラメンが、生命の誕生を寿いでいた。玄関から居間にかけて鉢植えが並ぶ。一月五日、林むつ先生は朝の光の中で年賀状を眺める。「ほら、この子は私が取り上げたの」と、家族写真が印刷されたはがきを差し出す。写真を見て「ひとこと」添えて書くから賀状

◎大事に生んで育てまじょう！

○いつの間にか六十年
を出すのは元旦を過ぎるのだという。林先生は、昭和二十年に助産婦の資格を取得してから約一人の赤ちゃんを取り上げたという。ベビーブームの時代に取上げた赤ちゃんが孫を持つ年代になった。親子二代、三代の誕生に立ち合う。町中で「林先生」と声をかけられることもたびたびだ。「どこに住んでいるの」

と聞けば、たいがいの赤ちゃんかわかるという。林むつ先生は大正八年、千葉市に生まれる。昭和十七年に結婚、夫は戦死した。仲人の医師のすすめで資格を取得し、助産院を開業した。自宅での出産がほとんどの時代、多いときは一日五人のお産があり、自転車ですり回っていた。四十歳で自動車免許を取った。産児制限の時代には、保健所やお寺や公民館に地域の人を集めて受胎調節指導をしたという。「いつの間にか六十年にもなっている。去年は、テ



12月30日に誕生した赤ちゃんを抱く林さん（1月5日）

〈〈助産師さん訪問〉〉

林先生はみんなのお母さん

「赤ちゃんはみんな神様よ」

「二度とアメリカの脅威となる強い国にならぬように」という占領軍の意図で押し付けられた▲妊婦に過重な負担となるなら簡単に中絶できるようと、おためごかしに作られた優生保護法も、実は日本人を減らしていこうという占領軍の狙いが隠されていた。その結果一億人を超える胎児が闇に葬られ少子化は一挙に進んだ▲昨秋は秋篠宮悠仁親王殿下がお生まれになった。今年には日本民族を守る強い覚悟でお腹の赤ちゃん達を守って行こうではありませんか。

呱呱の声

新年おめでとうございませう。本年もよろしくお願ひ申し上げます▲さて、ようやく教育基本法が改正された。これがつれにもつれた日本の諸問題解決の糸口になることを祈りたい▲憲法にしても教育基本法にしてもわが国が戦争に負け「二度とアメリカの脅威となる強い国にならぬように」という占領軍の意図で押し付けられた▲妊婦に過重な負担となるなら簡単に中絶できるようと、おためごかしに作られた優生保護法も、実は日本人を減らしていこうという占領軍の狙いが隠されていた。その結果一億人を超える胎児が闇に葬られ少子化は一挙に進んだ▲昨秋は秋篠宮悠仁親王殿下がお生まれになった。今年には日本民族を守る強い覚悟でお腹の赤ちゃん達を守って行こうではありませんか。

レビの取材と県の八十年史の原稿書きでたいへんだっただです」

ソファの傍らに、赤ちゃん誕生の写真、林先生が掲載された新聞の切り抜きなどがある。「みなさんが、貼っておいて」と持って来てくださるの」

JR五井駅から歩いて七、八分のところにある林助産院は、一階は生活スペース、二階は診察室、分娩室、入院室から成る。分娩室のベッドは、足を載せる分娩台でなく、普通のベッド。入院室にはベビーベッドと付き添い用の簡易ベッドが備えられている。

林先生は「哺乳類はみんな自然分娩をします。いろいろ手をかける病院でなく、できればね、助産院で自然に産みたいと思っている人も多い」という。

車を運転し、往診もする。出産は、月に一回〜二、三回。若い助産師を手伝いに

頼む。入院期間中の賄いの献立は林先生が作り、味をみる。

取材当日も、黒豆と果物をあえる自家製ヨーグルトや野菜の煮物が並んだ。どれも健康を考えたやさしい味がする。

○なぜ人の命を尊ばない？

十一時。二カ月検診の新井さゆりさんと颯馬ちゃんがやってきた。待合室を兼ねた居間で、林先生と話し合う。颯馬ちゃんは首のすわりがしっかりしている。ぐんぐんと足を突っ張る。母乳の子は首のすわりが早いという。

新井さんは「多くの人に助産院でいいお産をしてほしい。ここでは母乳のトラブルのことなど、いろいろ教えてもらえます」。

新井さんは第一子を病院で出産。陣痛促進剤を使い、会陰切開をするお産だった。テレビで助産院の存在を知

り、自然なお産を望んで林先生を訪ねた。二番目の子から林先生のもとで出産、颯馬ちゃんは第四子だ。家族が立ち会い、夫が臍の緒を切った。感動の出産だった。

林先生は、母乳ケアに力を入れている。マッサージによって、詰まっていた母乳が出るようになるという。

林先生は、予定日が近くなるとつとめて歩くように指導する。陣痛が始まれば入院だ。長年の経験により、生まれる時間の予想はほとんどぴったりだという。産後の入院最後の日は、うなぎ屋のおいしい重うなごに食事にし出す。すると、「たいい旦那さんにも食



2カ月検診に訪れた新井さゆりさん颯馬ちゃん。

べさせたいというから、とつてあげるの」。自宅での出産にちかく、しかも手厚く暖かなケアがうかがえる。

前日に報じられた歯科医師宅の兄妹殺人が話題になった。「なぜこのように人の命を尊ばんようになったんでしょうね」と真剣な眼差しのむつさんに、簡単に妊娠中絶してしまう風潮が原因のひとつでは？と問いかけると「私は、妊娠中絶は絶対反対！」と大きな声が返ってきた。「中絶は母体を傷つけるし、それが原因で妊娠できんようになる人もいる」と。続けて「それに、障害のある子が生まれると、離婚しろ」という親がいるけど、誰がその子

の面倒をみるのよ。きちんとして親が責任をもってね、育てなければなりません。生まれる子はみんな愛情が必要なのです」

○赤ちゃんを困んだ 幸せな家庭を

昼近く、十二月三十日に地域の総合病院で出産した人が、挨拶にみえた。高齢のため病院を選んだが、林先生に逆子をなおしてもらっていた。普通分娩だった。体操でなおらない逆子もある。林先生は、赤ちゃんの心音を聞きながら、慎重に時間をかけて赤ちゃんの位置をなおしていく。林先生は「いま、おっぱい何時間おきですか？」



林さんは、昭和63年に厚生大臣表彰、平成5年瑞宝章受章、昨年、助産師に与えられる村松志保子顕彰会表彰を受けている

新年のご挨拶



理事長 鎌田 久子

一陽来復の新春を寿ぎ、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。生命軽視の風潮も底を窮めました。今年からは、**生命を尊ぶ**機運が高まる年となりますように、心より祈念いたしております。皆様の、真心あふれるご活躍のお陰で、只今『生命尊重推進』の「光の拠点」(支部)が十三カ所誕生しております。まことに有難うございます。本年は、この「光の拠点」を、三十支部に殖してまいりたいと願ってお祈り申し上げます。

幹部用の具体的な活動指針は、一月下旬にお届け申し上げます。みなさまの居住地域における『天使のほほえみ』の果す役割は、非常に大きく、多岐にわたります。どうぞ生命の神秘にめざめていただく中絶防止はもとより、他殺・自殺も防ぐ、**愛の実践者**になっていただきたいと存じます。

皆様の御祥福と、ご活躍をお祈り申し上げます。

「泣いたらすぐ飲ませてはいけない。おっぱいが欲しいのか、暑いのか寒いのか、痛くて泣くのか、おむつがぬれたのか、それでなければ、甘えたくて泣くのか、慣れたら、泣き声を聞いてわかりますよ」と対応する。

「赤ちゃんは、汗かいて母乳を飲むでしょう。すごい運動量なの。顎の発達がよくなり、歯並びがよくなり、健康で頭のいい子になり

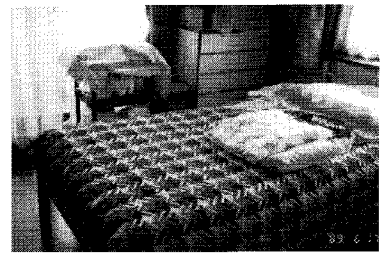
る。母親は乳がんの予防になります」

結婚十三年目に授かった赤ちゃんだという。夫婦とおばあちゃんが赤ちゃんを囲み、「林先生、抱いてやってください」。

喜びに満ちた一家が帰った。

助産師の仕事は、妊娠、出産、育児への関わりと移行して行く。訪問指導にも行く。ときには「おばあちゃん

んは、孫にむやみに物をあげてはだめ。お小遣いは正月とか誕生日にね」ときびしい。「赤ちゃんはみんな神様。お母さんの顔を見てね、おっぱいを飲んでね、お母さんが大好きなのよ。お父さんはもっと威厳を持ってというのがよ。お母さんはお父さんが働いているからこうやって生活できるんだよ」とあがめてね」と、赤ちゃんを囲んだ幸せな家



分娩室のベッド。ときに夫や家族が立合う。

庭のポイントを話す。

午後二時ごろに、逆子を

直したいという希望の妊婦さんが来ることになっていく。わずかのあい間に、家事をこなし、妊婦さんのためにお茶や軽食の用意をする。

林先生自身は子どもを持つことはなかった。「ひとりで寂しくないかと思われているけど、寂しいと思っていない暇はなかった。お産は、人生のある限り終わりはない。みなさんに頼られるうちが華」。明るく笑うむつさんを、結婚式の当日に出征、帰らぬ人となった若々しい夫の写真が見つめていた。

◆みんなの広場

香川県 森 靖子

十一月十五日朝刊第一面

『悠仁さま お宮参り』

パッと目に入ったお写真、

何とも言い尽せぬ清涼感、

親王殿下のほほえみと紀子

妃殿下のほほえみ。子供を

めぐる想像を絶する黒々と

した事件続きの昨今にあっ

て、これらを消し去って我

等を天上へと吹き上げて下

さる嬉しさ。ああまさに神

風。有り難さに溢れる感動

が走りました。命を尊ばな

い粗末にする原因は中絶に

有り。早く中絶防止を法制

化にまで持って行かねば

「天使のほほえみ」の会の

この目的達成のために、献

身のお働きを下さいます理

事長様始め、お世話下さる

方々への感謝を込めて会員

拡大に頑張ります。どうぞ

よろしく
お導き下
さい。



生命尊重の教育

「輝くいのち」を

若者たちにつたえて

短大、専門学校非常勤講師（看護師）

高橋綾子

毎年、多くの学生と出会うことのできた喜びと責務と緊張とが混在したような感慨を、授業のはじめに覚えます。なぜなら、担当科目の主題に外れない範囲のなかで「生命の尊厳」を伝えようとしているからです。谷口雅春先生著『生命の真相』という人生の羅針盤ともいえる書物を得たことが、

私の転機となりました。

これから日本や世界の中心となっていく若者たちに、

自分の生命、他人の生命の尊厳を知り、自らの死生観を持つてほしいと思えました。なかでも、人工妊娠中絶は大きな課題です。「出来ちゃったらおろせばいいじゃん」と思っている学生が多数です。そこで授業の中で卵子と精子の出会いや誕生、産婦人科医師池川明医学博士の研究されている「胎内記憶」、人工妊娠中絶手術を扱った「サイレント・

スクリーン」などの映像を見てもらいます。

また、一ヶ月までの胎児を紙に描き、毎回の授業で順番に一枚ずつ配布します。学生には、色を塗り、切り抜いて、腹部に当ててみるという疑似体験、新生児の命名、胎児の人形に触れる、人形での沐浴実習、小児救急法、生と死の絵本作りなどの実践を通して学んでもらいます。

学生達は、この授業を次のようにレポートしています。「本当に生命の誕生はすごいなあと感じた」「数多くの中から選ばれてやるとたどり着いた精子だけが卵子と一つになり私が生まれたことに感動した」「親に感謝する気持ちでいっぱいになった」「受精卵の中で力強く動きはじめた鼓動が今でも自分のなかで動き続けていることを知って自分を大切にしなければならぬ」と思った」「絵の赤ちゃ

んなんて興味がなかったけれど段々大きくなるのが楽しみになった」「絵の赤ちゃんなのに可愛くて大切に育てようと思った」「胎内記憶を持つ子どもたちがいるなんて驚きです」「妊娠中のお母さんの状態が赤ちゃんに伝わっていることがよく解った」「産んだ子が自分を親として選んでくれたとしたらとても嬉しい」

「妊娠中絶される赤ちゃんには逃げられない状態のなかで必死に逃げようとしていた」「衝撃的で感想も書けないほど辛い事実で悲しい」「中絶なんて絶対いやだ」「何も悪くない赤ちゃんが殺され声も出せず泣いている姿は忘れられない」「どんな事情があっても私は絶対産みません」「中絶の悲惨さを皆に知ってほしい」「胎児の人形は可愛く、ずっと手の中に入れて大切にしていた」「保育士をめざしている学生は「子ども達に生

命の大切さ、生きていることのすばらしさ、ありがたさを伝えていけたらいいなあと思う」等々と書いています。

私は「輝くいのち」を自分の置かれた環境のなかで力いっぱい伝えていくことが、よりよい日本を築くことにつながる小さな力となることを願って、今後も努力を重ねていきます。

◆◆◆編集後記◆◆◆

発売以来、好評を博している『いとけなき生命に光を』の第2版がこのたび出上来上がった。お一人で200部というようにまとめた注文され、広めて下さる方もいらつしやるのは、心強い。ブラジルからも、初版を50部購入し配布された方が、また50部注文して下さるなど、大きな波が世界に広がっていく気配が感じられる。ぜひ一度、お読み下さい。

主張

37億年に及ぶいのちの継承

永六輔氏（ベストセラー『大往生』の著者）は、自分の年齢を「37億年〇〇歳」と言う。日本では50数年前まで胎児期の十月十日（46週）を志歳とする数え年を使って、受胎の初めより人生のスタートと認めていた。更にその源々両親・祖母と遡れば、全ての人は永氏の言う37億年前の一個の原始細胞の神秘的な発生にたどりつく。いのちの尊厳は想像を絶している。